ぶんか

加藤清正から続く歴代熊本藩主達は、熊本の地に多くの伝統文化を残してくれました。

また、平成15年には「小代焼」、「天草陶磁器」、「肥後象がん」が国の伝統的工芸品の指定を受けるなど、それぞれの職人達が伝統の技を今に伝えてくれています。

窯元

小代焼は、細川忠利が豊前から熊本へやってきた時に職人が一緒に入国し、小岱山の麓で窯を開いたのが始まりとされています。

天草陶磁器は、日本で産出される磁器原料の8割を占める、良質の天草陶石を使った磁器及び陶器です。30以上の窯元が存在し、高い伝統性と若く個性的な作品が見られます。

八代焼（高田焼）は、細川忠利の肥後入国に伴ってやってきた朝鮮の陶工が始めたとされ、器の表面に白土で施す象嵌が特徴です。

網田焼は、江戸中期に天草の高浜焼の指導をもとに、藩営の窯としてスタートしました。初期は繊細で質の高い作品が多く、熊本藩の保護のもと幕府や大名への贈り物として焼かれていました。

網田焼

八代焼（高田焼）

天草陶磁器
高浜焼

小代焼

宮地手すき和紙

八代市の宮地に手すき和紙の技法が伝わったのは17世紀初めで、熊本藩の庇護を受け盛んに作られるようになりました。

現在もその技法を受け継ぐ紙すき職人が1軒だけ残っています。

来民うちわ

細川忠利が領内で大量に生産される竹と紙を活用するために奨励したのが始まりと言われています。昭和初期には年間生産600万本を数え、日本三大産地と呼ばれていました。現在では2～3軒の業者が残っており、その素朴な味わいにファンも多いそうです。

肥後象がん

資料提供：熊本県伝統工芸館

歴代の熊本藩主は、肥後金工に大きな関心と力を注ぎました。肥後象がんの歴史は、加藤清正に仕えた元鉄砲鍛冶の林又七に始まり、細川忠興に仕えた金工達の研鑽の末に生まれました。細川忠興自身も刀のつばや拵えなどを制作しています。

江戸時代中期になると、独特の象がんが次々と生み出され、黄金期を迎えたといいます。現在も多くのファンがおり、工芸館などでの実演販売や象がんづくり教室に集まっています。

第四章

祭

妙見祭

九州三大祭の一つ。11月22日は八代神社から塩屋八幡宮まで下る「お下り」、アーケードなどでは笠鉾やガメの展示などが行われる「御夜」があり、23日は獅子や笠鉾、亀蛇が参加する神幸行列が「お上り」し、八代駅前や砥崎河原などで演舞を披露されます。

八代神社は八代市妙見町にある神社で、上宮、中宮、下宮の三宮からなり、親しみを込めて妙見宮、妙見さんと呼ばれています。ちなみに、妙見神とは、北極星・北斗七星の象徴と言われています。

細川忠利が肥後に入国し、細川忠興（三斎）が八代に城主としてやってきたとき、妙見宮伝来の四寅剣を見学したところ、紋が九曜紋に似ていることから、妙見祭は細川家の直祭りとなりました。

忠興没後は家老職であった松井氏が城主となったことから、松井氏代々の請祭りとなり、より盛況を呈しました。

現在「八代妙見祭の御幸行事」として、国の重要無形民俗文化財に指定されています。

また、ユネスコ無形文化遺産登録に向け国が提案している「山・鉾・屋台行事」の構成遺産にもなっています。

◆氷室祭

八代で隠居生活を送っていた細川忠興の無病息災を祈願して、住民が近くにある三室山の氷室で貯えていた雪を献上したことが始まりと言われています。氷室とは冬の氷を夏まで貯めておく室（むろ）のことです。

現在では雪に変えて「雪餅」を食べ、無病息災を祈願し、厄入り・厄晴れ・還暦祝いの人達が無事を願う祭りとして有名です。

雪餅は、氷室祭の時にだけ作られる、雪に見立てたお菓子です。一つ5㎝四方の大きさで、表面は白い粒状になっています。中にこし餡が入った、優しい素朴な味です。

◆清正公まつり（加藤神社）

毎年7月第4日曜日に開催される加藤清正を祀るお祭り。加藤神社は、現在の熊本城本丸と宇土櫓の間に「錦山神社」として建立され、その後、明治7（1874）年に熊本市京町へ、昭和37（1962）年に現在の熊本市本丸に移りました。境内には文禄・慶長の役を記念した太鼓橋、旗立石など、清正由来のものが残されています。「せいしょこまつり」は、熊本に夏の訪れを告げる代表的な祭りで、約20基の勇壮なお神輿や子ども等の「千人清正」などが街中を練り歩き、大いに賑わいます。

◆本妙寺頓写会

本妙寺は、天正13（1585）年に加藤清正が父の追善のため 日真上人を招いて摂津（大阪）に建立したのが始まりで、清正が熊本城主となったことから城内に移転しました。清正死去後、寺が焼失したため、清正の廟所があった現在地に移転しました。頓写会は、本妙寺第3代高麗日遥上人が清正の菩提を弔う1周忌に法華経を書写したのが始まりと言われています。3回忌の際に他の僧侶が加わったところ一夜にして写経が出来たところから、頓（すみやか）に法華経（69384文字）を写経した法会、すなわち頓写会という名がついたと言われています。7月23日の祭り当日には10数万の参詣者で終夜にぎわいを見せます。

金春流（こんぱるりゅう）

「能楽」は観阿弥、世阿弥を祖として室町時代に確立したとされています。その中でも、最も古い歴史を持つ金春家は、「金春八郎」が豊臣秀吉に大きく用いられ、能楽界のトップの座に就きました。秀吉亡き後、金春八郎から一子相伝で金春流の能楽を受け継いだのが「金春流中村家」で、加藤清正とともに熊本に入り、その後も細川家とともに熊本の能文化を継承してきました。

茶道

細川家の初代である藤孝は日頃から「お茶を点てることができなければ武士じゃない、『文武』を兼ね備えてこそ武士である」と言っていたそうです。また、加藤清正も「恥をかかないように」と肥後では重臣たちに茶の湯を学ばせたりしたそうです。

特に、千利休の高弟「七哲」に数えられた細川忠興は茶道に長じており、熊本に残る「肥後古流」の開祖は利休の孫婿・古市宗庵が忠利に藩の茶道方として呼ばれたことに始まります。肥後古流は今日も伝えられています。

小堀流踏水術（こぼりりゅうとうすいじゅつ）

江戸時代の享保年間に熊本藩士小堀長順が創始した遊泳術で、今日まで小堀家によって伝習されています。現在では、熊本や京都、長崎にも活動拠点があります。甲冑姿のままで、腰上まで水面に浮き出しながら立ち泳ぎする技術は、見る人を驚かせます。県の重要無形民俗文化財にも指定されています。

肥後六花（ひごろっか）

肥後菊（ひごきく）、肥後椿（ひごつばき）、肥後山茶花（ひごさざんか）、肥後花菖蒲（ひごはなしょうぶ）、肥後朝顔（ひごあさがお）、肥後芍薬（ひごしゃくやく）の6つを「肥後六花」と呼びます。これらは、花形が一重一文字咲きであること、花色の純粋なことが特徴です。由来は、細川重賢の治世の時、武士のたしなみとして始められたもので、各々に花連（はなれん）と呼ぶ保存団体があり、その種子は門外不出として現在に伝えられています。熊本城竹の丸には肥後名花園が設けられており、折々のシーズンにはこれらの花を楽しむことができます。

～コラム～ 相良家七百年のめでたさ

人吉・球磨地域は、球磨川の流れと急峻な九州山地に囲まれた地の利を活かして、この地を700年にわたり治めた相良氏によって独自の文化が醸成されてきた。

源平争乱の際には、源氏の落人も平家の落人もこの地の山々へ身を隠したとも言われている。加藤清正は人吉球磨の入口ともいえる仰ぎ見るほどの大岩（清正公岩）を前に、その先の難儀を思い引き返したと言われている。

また、相良氏の菩提寺「願成寺」をはじめ33観音の寺社、国宝に指定された「青井阿蘇神社」など、国指定重文の社寺や仏像が数多く残る。

さらに、球磨焼酎は貴重なお米で造った焼酎。こんな贅沢な材料を使っていることから、いかに人吉・球磨が豊かであったかがわかる。

このように、人吉・球磨は非常に特色ある文化を今に伝えることから、「相良700年が生んだ保守と進取の文化～日本でもっとも豊かな隠れ里・人吉球磨～」として「日本遺産」に認定された。

◆青井阿蘇神社（国宝）

創建は大同元（806）年といわれており、青々と水が湛えた池「青井」と呼ばれていたことから、その名が冠せられたと言われている。また、創建の日が9月9日だったことから以後現在までこの日を「おくんち」としてお祭りが続けられている。

現在の社殿群は相良氏20代相良長毎によって、清正の熊本城築城の数年後に造営された。社殿の特長は屋根の棟が高く勾配が急な藁葺き屋根で、全体の基調は黒漆塗。細部の木組みは赤漆、彫刻や模様は極彩色であった。当時は今以上に漆が貴重で、漆一升は金一升と同等といわれていたことからも、相良家の財力ぶりがうかがえる。

◆ウンスンかるた

別名南蛮かるたともいい、元々はポルトガル人が日本に持ち込んだトランプを日本流にアレンジした「天正かるた」が始まりと言われている。「うんすんかるた」はゲームをより複雑にするために江戸時代に新たに考案されたもので、人吉に唯一残されており、その遊戯法は県の重要無形民俗文化財に指定されている。

なお、ウンは1を、スンは最高を表しており、「うんともすんとも言わない」の語源になったと言われている。

◆球磨焼酎

人吉・球磨には28の蔵元があり、それぞれ独自の焼酎を作っている。球磨焼酎の一番の特長は米が原料ということ。また球磨焼酎はスコッチウイスキーやコニャックブランデーと同じく産地指定された焼酎。まさに世界にお墨付きをもらった焼酎の一大産地といえる。

◆33観音めぐり

春と秋のお彼岸の際に一斉開帳される33観音めぐり。それぞれの村に地霊を崇め護るように鎮まっていて、里人の中に息づいている。時には集落の人々による「お接待」を受けることもあり、心が温かくなる寺めぐり。

◆おくんち

9月9日に行われる人吉地方最大のお祭り。御神幸行列では神輿、獅子舞、神馬、稚児などの長い行列が人吉の中心市街地を練り歩く。

◆キジ馬

人吉地方の郷土玩具として古くから作られているもの。その昔、平家の落人たちが辺鄙な山奥に暮らす中で、自分達の境遇を慰めるため「きじ馬、花手箱、羽子板」などの美しい木工品をつくりだした伝承が残されている。人吉・球磨では、古くより男の子にはきじ馬、女の子には花手箱・羽子板を土産にしていたそう。

特集

刀剣の世界

占いやまじないの道具、狩りや戦の道具、権力の象徴、装飾品。古くより日本刀は様々な用途で使用され、その美しさで人々を魅了してきました。

昨今では刀剣を擬人化したゲーム「刀剣乱舞」がブームになっています。このゲームを通して、若い女性を中心に刀剣そのものの人気も高まっています。

“折れず曲がらず、質実剛健の刀”

加藤清正と胴田貫正国（どうだぬきまさくに）

豊臣秀吉の九州平定後、熊本の北半分を任された加藤清正。軍備拡充の必要に迫られた清正は熊本で優秀な刀工を探しました。そこで白羽の矢が立ったのが、菊池郡（現在の熊本県菊池市）の胴田貫という場所で作刀をしていた刀工たち。彼らの打つ刀は、刃の幅が広く、反りの少ない、豪壮ですが飾り気のない質素な刀でした。しかしその丈夫さと切れ味は実戦で抜群の威力を発揮し、清正は大変気に入ったとされています。

その後、家臣たちにも刀を奨励し、国勝と信賀という兄弟に自身の名を与え、刀工たちを束ねさせます。ふたりは清国、正国と名乗り、胴田貫の開祖となりました。

“風流優雅な名に隠された血塗られた逸話”

細川忠興と歌仙兼定（かせんかねさだ）

勇壮果敢な武将として、また利休七哲と呼ばれるほどの文化人でもあった細川忠興。一見その優美さを称するような名のつけられた刀のように見えますが、実はとある血塗られた逸話がのこっています。

忠興は、初代熊本藩主となった息子・忠利の藩政運営が気に入らず、側近たちを呼び出し、その場で奸臣（かんしん）（国を傾けた臣下のこと）を成敗しました。このとき討たれた家臣が六人だったことから「六歌仙」にかけて名づけられたとされています。また、この刀で成敗された家臣が三十六人にものぼるからとも云われています。（「三十六歌仙」にかけて）

“人から人へ、多くの人の人生を辿った短刀”

細川忠利と小夜左文字（さよさもんじ）

とある女性が左文字の短刀を掛川（静岡県掛川市）へ売りに行く際、小夜の中山で山賊に刀を奪われ、殺されました。残されたその子どもは叔母に育てられ、研師の弟子になります。その研師のもとに、客として短刀をもった浪人が現れました。その浪人こそ、自身の母親を殺して短刀を奪った相手でした。弟子は刀を見るふりをしてその浪人に仇討ち。その話を耳にした掛川城主山内一豊より、左文字とともに召し上げられます。その後、細川藤孝（幽斎）の手に渡り、西行の歌にちなんで「小夜左文字」と命名されました。寛永４（1627）年の小倉藩大飢饉の際、細川忠利が財政危機を脱するべく売却、黒田家や浅野家を経て土井家へ渡っていきました。

「刀剣乱舞（とうけんらんぶ）-ONLINE-」

名刀を擬人化した「刀剣男士」を収集・強化し、合戦場の敵を討伐していく刀剣育成シミュレーションゲーム。DMMゲームズとニトロプラスが共同製作。

“幻の宝刀”螢丸

南北朝時代の武将阿蘇惟澄（これずみ）が身に付けたと伝えられる刀。激戦で刃こぼれした刀に蛍が群がり刀が直ったという伝説が名前の由来になっています。阿蘇神社の宝刀として秘蔵されていましたが、太平洋戦争後、所在不明に。
現在、クラウドファンディングを活用した復元プロジェクトが進められています。